

序論)

東日本大震災以降、波というと私達はどうしてもあの大津波をイメージし易いのではないのでしょうか。波は多くのものを壊し、奪い、失わせる。そのようなものだというイメージがあるように思います。

しかし、イザヤ書に見る波は恵みの波であり、私達に神様の愛と赦しと平安を与えてくれるものです。というのもイザヤ書は、波が上下に揺れているように、神様に厳しい裁きを伝えたかと思えば、次には神様の赦しを伝え、人々の罪深さを伝えたあとには神様の憐れみを伝える。そのように一見すると厳しいメッセージと恵みのメッセージの上下の高低差が激しい預言書です。

でも、ずっと読み続けていると神様は確かにイスラエルの愚かさや、私達の愚かさを明確に示しながら、それでも「恐れるな。大丈夫だよ。」という愛のメッセージを仕切りに語り続けて、私達が罪深いからこそ、このお方にすがらなければいけないのだということを、波のように語り続けてくださっています。

文脈) 43章との繋がりも波のよう

今日から私達は44章を読んでいます、その前の43章との文脈的な繋がりもまさに波のような語りかけになっています。

みなさん、前回の43章の最後はどのような終わり方だったでしょうか。43章27節、28節をお読みいたします。

43:27 あなたの最初の先祖は罪を犯し、あなたの仲保者たちはわたしに背いた。

43:28 それで、わたしは聖所のつかさたちを汚し、ヤコブが聖絶されるように、イスラエルがののしられるようにした。」

これは、この箇所の前に神様が「あなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」(43:25)と宣言された後、仮に神様がイスラエルの罪を覚えておられたらどうなったかという話です。

イスラエルは最初の先祖から罪を犯していました。そればかりか祭司や預言者といった【主】と人々の間にたって【主】に仕えるべき人たちも【主】に背いていました。だから、神様がそのイスラエルの罪を覚えておられたのならば、「神様はそのような指導者たちを汚れた者とし、イスラエルを聖絶して滅ぼしつくすのだ。」とそういわれています。

つまり、43章の最後では、イスラエルに対する厳しい罪の現実を示されたのです

1) 創造主なる【主】の呼びかけ

さてでは、今日の44章では【主】はどのようなメッセージを語られておられるでしょうか。1節と2節を読みましょう。

44:1 「今、聞け。わたしのしもべヤコブ、わたしの選んだイスラエルよ。

44:2 あなたを造り、あなたを母の胎内にいるときから形造り、あなたを助ける【主】はこう言う。恐れるな。わたしのしもべヤコブ、わたしの選んだエシュルンよ。

1節は「今、聞け。」という言葉から始まっています。この「今」というのは時間的な今この瞬間という意味での呼びかけではなくって、44章の最後でイスラエルの罪深さ、本来ならば滅びなければいけないというその厳しい現実を突き詰められた今だからこそ、私の呼びかけを聞きなさい。という意味での呼びかけです。

イスラエルが罪深いからこそ、この44章のメッセージを聞きなさい。と【主】は言われているのです。

しかも、ただ聞けと言っているのではなくってイスラエルと神様との関係をもう一度明確にして、その上で「恐れるな」と命じておられます。

みなさん、イスラエルと神様の関係はどのような関係でしょうか。

1節をみると「主人としもべの関係」「選びだした人と選ばれた人」という関係であることがわかります。つまり、神様側に権威があって、その権威者が一方的に選んだ存在がイスラエルだ。ということです。

次に2節をみてみると、神様はイスラエルの創造主であることを強調しておられることがわかります。しかもただの造り主ではない。イスラエルという形が造られる前からイスラエルのことを形造られた神様。つまり、イスラエルの設計者であるということです。みなさん、設計者は実際にその設計図に従って作る人より、その作られたもののことをよく知っています。だってそうですよね。自分が設計しているわけですから、設計図に対してその作られた作品が、正しく作られているのか。間違っているのか判断することができますし、設計をした人だから仮にその作品が壊れていたとしても、どのようにすれば本来の姿に直せるのか。誰よりもよくわかっている存在が設計者です。

神様は、イスラエルのことをイスラエルが形造られる前から作っておられた設計

者です。だから、イスラエルをどのように助けたら良いか、イスラエルをどのように修理したらよいかを一番よく知っておられるのが神様なのです。そして、その神様が「あなたを助けるよ」と言っておられるわけですから、このままでは滅びるしかないイスラエルであったとしても、この神様の助けの声を聞くときに「恐れる」必要はなくなるのです。だから、2節の最後のことばというのは、皮肉とユーモアが聞いたすごいことばなのです。

みなさん、「ヤコブ」ってイスラエルのことですけど。もともとヤコブってどうゆう意味だったか覚えていますか？ 「ヤコブ」とは「かかとを掴む者」という意味があり、そこから追い抜く者とか、曲げる者という意味を持つようになりました。

だから、「わたししもベヤコブ」っていうのは「わたしのしもべかかとを掴む者よ」「まげる者よ」という意味になります。そして、次に神様はイスラエルのことをなんといわれているかという「わたしの選んだエシュルンよ」と言われています。「エシュルン」というのは「まっすぐな者」という意味があるそうです。

わかりますか。「わたしのしもべ「曲がったもの」ヤコブよ。』といいながら「わたしの選んだ「まっすぐな者」よ」と呼びかけてくださっているのです。

みなさん、神様は私達が【主】に背いて曲がりくねっていたとしても、私達を選んで私達をまっすぐな者にしてくださるのです。

だから、私達は恐れなくて良いのです。イスラエルの創造者、そして、私達の創造者である神様は、私達のことを誰よりもよく知っていてくださって、私達をまっすぐにしてくださいます。だから、私達は恐れなくてよいのです。

2) 【主】の霊を注がれる

次に3節から5節の部分に目を向けていきたいと思います。ここで神様はイスラエルに水を注いでくださるという約束をしてくださっています。

この約束は以前にも語られている約束です。それはいつかというところ43章の19節、20節です。もう一度、読んでみましょうか。

43:19 見よ、わたしは新しいことを行う。今、それが芽生えている。あなたがたは、それを知らないのか。必ず、わたしは荒野に道を、荒れ地に川を設ける。

43:20 野の獣、ジャッカルや、だちょうも、わたしをあがめる。わたしが荒野に水を、荒れ地に川を流れさせ、わたしの民、わたしの選んだ者に飲ませるからだ。

43章のこの箇所をメッセージしたときに、「これはイエス様が私達にいのちの水を

くださることであり、最終的には黙示録の 20 章で世の終わりの時に与えられるものとして約束されているものだ。」とそう説明しました。その説明は間違いではないのですが、44 章では神様がイスラエルに水を注いでくださることを、別の視点で説明してくださっています。3 節を一緒に読んでみましょう。

44:3 わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ。

前半の部分と後半の部分が対になっていることがわかります。

つまり、前半の「わたしは潤いのない地に水を注ぎ」ということが、後半の「わたしの霊をあなたの子孫に」に対応しており、前半の「乾いたところに豊かな流れを注ぎ」が後半の「わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ」というように対になっています。これを整理すると、神様が注ぐ水というものは神様の霊のことであり、神様の祝福であることがわかります。

みなさん、実際に、神様は私達に聖霊様を与えてくださいましたが、この聖霊様こそ、私達に永遠のいのちを与える存在であり、私達の祝福そのものなのです。だから、私達がこの聖霊様によって生きる時に、4 節にある「流れのほとりの柳の木のように」生き生きとした人生を歩むことができるのです。

当然、イスラエルも神様からこの預言の通りに聖霊様を与えられる時、彼らは本当の意味で神の民として生き生きとした人生を歩むことができるのです。そして、その預言の成就の一部があのでペンテコステだったのです。

みなさん、ペンテコステはすでに過ぎましたが。ペンテコステの時に何があったのでしょうか。家の中に閉じこもっていた弟子たちが、家の外に出てあらゆる国の言葉で生き生きとして【主】を証ししはじめましたよね。

私達に注がれる聖霊様は、まさに私達をいかすいのちの水として、私達に力を与え、大胆に【主】を証しさせてくださるのです。

だからみなさん、この聖霊といういのちの水が与えられた者がどうなるかというと、5 節を読みましょう。

44:5 ある者は『私は【主】のもの』と言い、ある者はヤコブの名で自分を呼び、ある者は手に『【主】のもの』と記してイスラエルの名を名乗る。』

この箇所をある聖書学者は、異邦人たちに対する預言ではないかと言っています。つまり、聖霊が与えられたイスラエルだけじゃなくって、異邦人も「私は【主】のもの」だというようになり、自分はヤコブだ。自分はイスラエルだといいいながら、【主】の名を証ししていく。そのようになるのだとこの箇所は預言しているというのです。

確かに今、私達はデボーションで使徒の働きを読んでいるのでわかりますが、聖霊様が与えられたことによって、教会が活発的に動くようになり、いわゆるユダヤ人や、イスラエル人だけが神の民として歩むのではなく、あらゆる国の人たちがイエスは【主】ですと証しするようになっていきました。

だから、新約聖書の I コリント 12 章にはこのようなみことばがあります。

I コリント 12 章 3 節後半

聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。

聖霊様の働きの代表的なものは、わたしたちに「イエス様は【主】です。」と告白させ、「わたしたちは【主】のものです」と告白させることです。これは逆にいうと聖霊様の働きがなければ、例えイスラエルであったとしてもこのような告白は人のちからだけではすることができないことなのです。神様が、聖霊様を神の民に与えてくださらないのなら、私達は「私は【主】のもの、【主】と共にいきると。」堂々と宣言をし、堂々と神の民として生きていくことができないのです。

だから、みなさん。みなさんがもし、今の自分が神の民として生き生きと生きていてない。神の民としての活力を失っていると思うのなら、今日の 3 節にある「わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ。」という御言葉にすがって、神様に聖霊様を求めてください。

ぜひ、『神様、神様はイスラエルに「わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ」と約束されました。この約束の通りに私にも聖霊様の満たしを与えてくださり、生き生きとした神の民として歩めるようにしてください。』そのように祈り求めていただきたいと思います。

3) 【主】 以外に神はいない

そして、最後、神様は6節～8節で、もう一度、この聖書の神、イスラエルの神以外に、他に神はいないということを宣言しておられます。神様は以前もイザヤ書43章で自分だけが神だと言われていました。それをもう一度、宣言されています。順番に読んでみましょう。6節

44:6 イスラエルの王である【主】、これを贖う方、万軍の【主】はこう言われる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はいない。

ここにある神様の自己紹介の中で特徴的なのは、やはり真ん中にある「わたしは初めであり、わたしは終わりである。」このことばですね。

これは時間的なはじめと終わりをご支配されているというよりは、すべての始まりは神様からはじまっており、すべての終わりも神様による。ということだと思えます。時間というよりは、論理的な初めと終わりをご支配されているということです。

みなさん、神様が私達を造ってくださらなければ、私達の存在というものは今ここにいないのです。また、神様がこの地球を造ってくださらなければ、今のような地球は存在しないのです。

一昔前では、宇宙で生命が生まれる確率は大きなプールに腕時計の部品をバラバラに入れてかき混ぜた時にたまたま腕時計の形に組み上がる確率と同じといわれていました。そして、宇宙の星の数や、時間の長さを考えて、何千億、何百億とある星の中で、何億万年もの時間があれば、偶然そのように生命が生まれることもあるのではないかと多くの方が考えています。

でも、普通に考えればプールに腕時計の部品をいれてかき混ぜるだけで、たまたま偶然腕時計が完成することなどありえないのです。

腕時計は、ちゃんとそれを設計し、そのための材料を揃え、加工し、組み立てる人がいなくては腕時計になることはできません。

それと同じで、私達も、私達のあり方を設計し、その通りに創造して下さった神様からはじまらなければ、この世に存在することなどできないのです。

そして、この世界のすべてを終わらせることができるお方も神様以外ありえません。私達人間は核兵器などの大量破壊兵器を作ることが出来ます。でも、どんなに

核兵器を何百発、何万発爆発させて、地球を壊すことができたとしても、宇宙を破壊し、世界を終わらすことはできません。

しかし、すべてのはじめである神様は、すべてを終わらせることもできるお方なのです。このような神様がほかにいるのでしょうか。

よく日本や多くの国で拝まれている樹齢何千年もの大木が、世界のはじめとおわりを定めることができるのでしょうか。人の手で作られた仏像や偶像が、わたしたちの人生のはじめと終わりを定めることができるのでしょうか。できません。

どんなに立派な大木であったとしても、どんなに精巧につくられた神の像であったとしても、わたしたちのはじめにも、おわりにもならないのです。

当然、それらの偶像はイスラエルの歴史がどうなるのか、私達の人生がどうなるのか、語ることはできません。しかし、初めであり、終わりである聖書の神様、まことの創造主なる神様は、正しく預言をし、その通りに歴史を動かすことができるお方です。だから、神様は言われます。7節

44:7 わたしが永遠の民を起こしたときから、だれが、わたしのように宣言して、これを告げることができたか。これをわたしの前で並べ立ててみよ。彼らに未来のこと、来たるべきことを告げさせてみよ。

今も多くの天文学者や科学者たちが、世界のはじまりを調べようとしたり、これから世界がどうなるのかを統計的に導きだそうとしたりしています。でも、推察や予想を語ることもできて、聖書の預言のように世界の最初と終わり、さらにはその途中にある必ず起こることを語ることはできません。

本当の意味で歴史を最初から最後まで語るができるのは、創造主なる神様だけなのです。そして、その神様が、イスラエルに、そして、私達になんと言っておられるのでしょうか。

結論)

44:8 おののくな。恐れるな。わたしが、以前からあなたに聞かせ、告げてきたではないか。あなたがたはわたしの証人。わたしのほかに神があるか。ほかに岩はない。わたしは知らない。

私達のことを最初から最後まで知っておられる【主】が言われます。「おののくな。恐れるな。」と、そして、私達が「【主】の証人である」とも言われています。

だからみなさん、この世のすべてのことを恐れること、怯えることをやめましょう。たとえ自分が弱くて、罪深くて、滅びるしかないものであったとしても、それでも、わたしたちの最初と最後を定めておられる【主】が恐れるなとっておられるのですから、恐れるのをやめましょう。

世界のすべて、私達のすべてを定めておられる神様は、この聖書の神様しかいません。私達が本当に頼ることができるお方は他にはいないのです。

だからこそ、このお方が聖霊様を与えてくださり、私達を助けてくださると信じ、このお方に頼って、平安の中を歩んでいきましょう。